学苑　第九五三号　一〜二三（二〇二〇・三）

泉鏡花「年譜」補訂（十九）

吉田昌志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二（平成十八年一月二十日）収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号（平成十九年一月一日）掲載の「補訂㈠」、七九七号（平成十九年三月一日）掲載の「補訂㈡」、八一九号（平成二十一年一月一日）掲載の「補訂㈢」、八二一号（平成二十一年三月一日）掲載の「補訂㈣」、八二六号（平成二十一年八月一日）掲載の「補訂㈤」、八四三号（平成二十三年一月一日）掲載の「補訂㈥」、八四五号（平成二十三年三月一日）掲載の「補訂㈦」、八五〇号（平成二十三年八月一日）掲載の「補訂㈧」、八五五号（平成二十四年一月一日）掲載の「補訂㈨」、八五七号（平成二十四年三月一日）掲載の「補訂㈩」、八六二号（平成二十四年八月一日）掲載の「補訂（十一）」、八六七号（平成二十五年一月一日）掲載の「補訂（十二）」、八六九号（平成二十五年三月一日）掲載の「補訂（十三）」、八七九号（平成二十六年一月一日）掲載の「補訂（十四）」、八九一号（平成二十七年一月一日）掲載の「補訂（十五）」、九〇三号（平成二十八年一月一日）掲載の「補訂（十六）」、九一七号（平成二十九年三月一日）掲載の「補訂（十七）」、九二七号（平成三十年一月一日）掲載の「補訂（十八）」に続くものである。

内容は、［誤記・誤植の訂正］、［本文の訂正・追加］、［典拠の訂正・追加］、［新たな項目］の四部に分かち、書式を次の通りとする。

一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。

一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公刊資料の翻字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】の項には、内容の解説、考証等を記した。

一、引用文の仮名づかいは原文のままとし、旧字体・合字・異体字は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。傍点、圏点は概ね原文のままとした。

一、引用文の中略部分は、総て「(…)」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかった。引用文の誤記・誤植は、［ ］内に補正した。

一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかった。

一、［本文の訂正・追加］では、訂正部分、新たな追加部分に傍線を付して区別した。

一、文中の敬称は、原則として省略した。

一、必要に応じて、「＊」のあとに注記事項を補った。

［本文の訂正・追加］

明治三十六年（一九〇三）　癸卯　三十一歳

三月　十九日、尾崎紅葉は横寺町の見舞客を避け、芝新堀町二十五番地の喜久夫人の実兄樺島直次（二）郎方、岳父玄周の隠宅に移った。

四月　四日、午後、後藤宙外とともに新堀町の紅葉を訪れ、座中、紅葉が足達疇邨に依嘱して当日届いた「化及我」の刻印の意味を訊ねた。

【典拠1】尾崎紅葉「十千万堂日録」（岩波書店版『紅葉全集』第十一巻、平成七年一月二十六日）

（明治三十六年三月）十九日　曇。八時起。彼岸の入とて牡丹餅製造中也。（…）十二時前芝浜松町に寄りて後新堀町着、午少しく過ぐ。（…）

卅日　晴。暖。（…）十一時、暖に乗じて疇村を訪ひ「化及我」の遊印を嘱す。

（明治三十六年四月）四日　晴。

九時起。

十時疇村来り「化及我」の石印刻成る。（…）

午後三時秋濤と写真（ノオトルダアム口絵用）合撮の為丸木に会する約有り。既に出でんとするに際し宙外氏鏡花生と共に来訪。故に通話して丸木に来れる秋濤子に再会を申入れて不赴。

【典拠2】後藤宙外君談「紅葉山人追憶録 第四」（『新小説』八年十三巻、明治三十六年十二月一日）

それから近頃のことに付て御話致しますと、丁度大学病院を出なすつて芝の樺島さんとかの別荘に暫時居られた時に泉君と一緒に訪ねました、其時は大変工合の悪い時だと仰有いましたが、でも快活に例の雄弁滔々で以て話された、側に読さしの『荘子』がありまして、それを読んで御出でになつたのと見えます、丁度「化及吾」（ママ）といふ印が彫れて来たばかりの所でした、其時には既に死を覚悟されて居ったものと思はれます、泉君が「化及吾」と云ふのはどう云ふ意味でせうと問はれた、「こりやア荘子の中から選んだのだよ、詰り死ぬるお鉢が己の所へ廻つて来たと云ふ意味さ」と云ふのでした。既にあの時からどうも死を決して居られたやうに私は思つて居ります、

【注記】

「年譜」に四月四日の訪問先を横寺町としたのを、「補訂㈢」で芝新堀町と訂正したが、今回、紅葉の新堀町の逗留先を具体的に記し、「化及我」の印をめぐる問答も追加した。

引用を省いたが「十千万堂日録」三月十八日に「平造をして一車に雑具を芝に送らしむ。」とあり、また同日付角田竹冷宛書簡に「本日芝新堀町廿五樺島方に引移り申候退隠静養の心底に候間他へは御洩し被下間敷願上候」と書送っている通り、十四日退院の当日に入澤達吉博士から胃癌の宣告を受けた紅葉は「退隠静養」のため、夫人の実兄方へ移ったのだった。

芝の樺島宅への移行については、退院直後の岡田朝太郎宛書簡（三月十五日付）に、

扨退院後は一寸転地とも存居候処入沢氏不賛成に付自宅療養といふ事にいたし候然し宅に居てはおのづから百事に絡はられ来客の頻繁なるも身の毒に相成可申に付芝の親類に広き控家有之是非それに参り当分静養せよと昨夕妻の兄両名打揃ひ参り勧告切に有之小生もそれ妙ならんと考へ候間明日あたり一先引移り可申心得に有之その前一寸面晤を得たく候へども芝に参り候ても一週に一度くらゐは帰宅いたし候事に候間ゆる〳〵拝顔可致今遅遅いたし居候へば明日の新聞にて来訪者雑踏致候は知れたる事に候故極々親友の外には之を洩さず旅行中と申立て暫く退隠静養の事にいたし候

とあるのに詳らかである。「日録」からはなかなか読み取りにくいが、このころ一と月ほどはおもに新堀町に逗留しながら、おりおり必要あれば横寺町にも帰るという、両所を往還する時期であったことに留意すべきである。

「明日の新聞」とは、十六日付「二六新報」（三面）の「紅葉山人の消息」において胃癌の診断結果が公表されることをさす。「妻の兄両名」は樺島信太郎、直次（二）郎の兄弟、ともに父玄周の後を継ぐ医師、信太郎は芝浜松町で開業していた。典拠1「日録」三月十九日の「芝浜松町に寄りて」とは、浜松町一丁目十五番地の信太郎宅か、または同番地に住む、三女三千代が養女となった叔父荒木舜太郎の家であろうと考えられる。尾崎家では、この信太郎宅を芝の「本宅」あるいは「浜一本家」と称し、「日録」にもしばしば記載がある。

「芝の親類に広き控家有之」とは、紅葉歿後にその遺族のことを報じた「文士遺族の消息（中）」（「読売新聞」明治四十四年六月九日付・三面）に、

遺族は故人の主なる遺物を芝区新堀町二五番地の居宅に移して同所を永住の地とした、同邸は未亡人きく子（三八）の里方なる同区浜松町医師樺島玄周氏別邸の離座敷で、母家には未亡人の父母と兄信太郎氏とが居住して遺族監督の任に当つて居る

とある岳父玄周の「離座敷」であったと思われる。遺族は三十七年三月を限りに横寺町を引払って当地へ移っていたのだった（移転の時期は、勝本清一郎「尾崎紅葉」『近代日本の文豪Ⅰ』読売新聞社、昭和四十二年七月十日、を参照）。

典拠1、四月四日の「ノオトルダアム」は、長田秋濤が紅葉病床の生活を扶助すべく、ユーゴー原作「ノートルダム・ド・パリ」を「鐘楼守（しゅろうもり）」との題で訳出提供し、これを「紅葉山人訳」として早稲田大学出版部からの刊行を図ったもの。生前に間に合わず、歿後の十二月十八日に上下二巻で刊行された。上巻下巻ともに紅葉の肖像写真の口絵が付いているが、この日秋濤と撮影を約していたのは、「最近撮影」と題し、両名が並んで写っている下巻のものだろう。「丸木」とは、芝区新桜田町十八番地にあった写真館（主人丸木利陽）と思われる（住所、主人名は『東京明覧』集英堂、明治三十七年三月三十一日、に拠る）。

なお、この翻訳は秋濤の単独ではなく、のちに交通学の大家として早稲田大学の教授となった伊藤重次郎（号十字楼）が下訳したものであったという（柳田泉の「十千万堂日録」の「註」。中央公論社版『尾崎紅葉全集』第九巻、昭和十七年九月十五日）。さらに門下生のうちこの翻訳に関わったのが徳田秋聲で、『思ひ出るまゝ』（文学界社、昭和十一年四月二十日）の「代作」の章に「鐘楼守が長田氏によつて、提供されたことは、兎も角大きな功徳であつたし、早稲田の人達——市島、高田両氏であらう——が、それを千円で買つてくれたことも、感謝していゝと思ふ。」と、本書における市島謙吉、高田早苗の盡力に言及している。さらに「先生はこの原稿に筆を入れはじめたが、それも最初の十枚くらゐで、所々文字を訂正し、語尾を先生流に直したのである。それの加筆訂正は私が先生に吩咐かつて遣つた」が、「厖大な鐘楼守の原稿は、相当長いあひだ私の牛込の下宿の机のうへにあつた。」とまで述べているものの、その後の刊行にいたる経緯については記されていない。

最晩年の紅葉宅玄関番であった山里水葉筆記「十千万堂日誌」の九月十六、十七日の条に「ノオトルダアム」の校正に従事しているむね記述があるから、この時には組版印刷の段階に入っていたのである。

鏡花がその意味を訊ねた「化及我」とは、「荘子」の「外篇 至楽篇」の一節に基づくが、「十千万堂日録」の明治三十六年三月二十一日に「十時紫山氏荘子講義持参。」とあって、同じ新堀町内に住む「二六新報」在籍の堀紫山が届けた本に触発され、二十九日には「客を謝して臥して荘子を見る。」とあり、典拠1のごとく翌三十日足達疇邨への印刻の依頼となったのである。

紫山の届けた「荘子講義」がいかなる本なのか特定できないが、同時代の活字

本では博文館版「支那文学全書」第八編『荘子講義』下巻（明治二十五年十一月二十五日）が流布しており、本書から当該個所の文を引いてみる。

支離叔與㆓滑介叔㆒観(ル)㆓於冥伯之丘。崑崙之虚。黄帝之所㆑休(スル)。俄(ニシテ)而柳生(ス)㆓其左肘㆒(ニ)。其意蹶蹶然(トシテ)悪(ム)㆑之(ヲ)。支離叔曰。子悪(ム)㆑之(ヲ)乎。滑介叔曰。亡(シ)。予何(ソ)悪(ン)。生者。仮借也。仮(リテ)㆑之(ヲ)而生(スル)生者(ハ)塵垢也。死生(ハ)為(リ)㆓昼夜㆒。且(ツ)吾與㆑子観(テ)㆑化(ヲ)而化及(フ)㆑我(ニ)。我又何(ソ)悪(ン)焉。

（傍線は引用者）

注によれば、「支離叔・滑介叔はいずれも寓言上の名」で、支離叔は形を忘れた者のたとえ、滑介叔は智を忘れる者のたとえ、この二人の対話を通して「生を仮借のすがたと見、死生を超越する立場を説く」（遠藤哲夫・市川安司「新釈漢文大系」八巻『荘子』下、明治書院、昭和四十二年三月二十五日）という。左肘に突然出来た瘤を、万物の生成はたまたま天地の気を仮りて成ったもので、決して嫌なものだとは思わぬ、と滑介叔は答えたのである。紅葉が文中「化及我」の語を択んだのは、胃に癌腫の出来た我が身を重ね、この節全体の説く生と死の連続一環、生死の超越に心を動かされるとともに、死期のいよいよ迫ることを悟ったからであったろう。先の「日録」二十九日の「客を謝して臥して荘子を見る。」に続いて「胃中不消化甚しく苦む、近来多く有らざる所。病勢増進せるか。」とあるのがその証左になる。

「柳」を「瘤」ではなく、文字通りの「柳の木」と解すべきとする注（池田知久『荘子（上）全訳注』講談社〈学術文庫〉、平成二十六年五月九日）もあるが、「柳の木」では紅葉の実感から離れてしまうことになる。『荘子講義』は「左臂ニ瘤ヲ生シタリ」としている。

「化及我」の印は、明治三十六年四月二十日付加賀豊三郎宛書簡に「四月廿日新成」と記して「満身華影」「紅葉散人」の印とともに捺されているほか、『換菓篇』（博文館、明治三十六年十月二十四日）の机に肘をついた口絵写真（発病後一箇年後之像）の標題となってその右下（あたかも左肘のところ）に捺されており、また典拠2の後藤宙外の談話の載った「新小説」巻頭「故紅葉山人印譜」にも収められている。最晩年、病軀の紅葉愛玩の印刻としてよいだろう。

明治四十年（一九〇七）丁未　三十五歳

七月　十四日、本郷座の一番目狂言として「風流線」（七幕十二場、番附では佐藤紅緑脚色）が初演された。配役は、水上規矩夫・三太母おかん＝青木千八郎、堅川昇＝水野好美、村岡不二太・唐澤新助・捨吉＝藤澤浅二郎、小松原龍子・河童の多見次＝喜多村緑郎、巨山五太夫・眇目の三太＝中野信近、塚原伝内・工夫力松＝五味国太郎、巨山夫人美樹子＝木下吉之助、秀岳妻おつま＝児島文衛、鼓打幸之助＝山中新三郎ほか。岡田八千代は十八日にこれを見物し、芹影署名で長文の劇評「本郷座の『風流線』」を「歌舞伎」（第八十八号、八月一日発行）誌上に寄せた。久保田万太郎は二十日に大場惣太郎（白水郎）同道で観劇し、舞台の感想を日記に誌した。

【典拠1】「しばいとゆうげい」（「都新聞」明治四十年七月二日付・三面）＊活字の大きさは均等とした。

▲本郷座　雲右衛門の今晩は義士本伝と銘々伝の内を演ずる由又同座七月狂言は既報の如く藤澤、喜多村、木下、児島、深澤、青木、五味などの従前の一座へ水野と中野が加入し鏡花作「風流線」七幕十二場にて場割は

小松原家園遊会、手取川かたがり地蔵、金沢公園、仮名倶楽部、多見次の詭計、芙蓉館夜襲、黒髪谷街道、絵姿の呪咀［、］水底の密室、工夫の乱入、再び水底の密室、幽霊の結婚

【典拠2】「◎各座の盆狂言」（「報知新聞」明治四十年七月十日付・四面）＊同前。

▲本郷座「風流線」の役割の左(ママ)如し

小松［原］家令嬢龍子後に侠婦お龍、河童の多見次（喜多村）巨山五太夫、眇目の三太（中野）秀嶽妻おつま（児島）塚原伝内、一番鎗の力松（五味）憲兵少尉堅川昇（水野）工学士水上規矩夫、三太母おかん（青木）巨山夫人美樹子（木下）堂守水谷転倒太（磯野）代議士武藤謙吾（倭）警部十時猛連（東明）三宮村の村長九郎次、大曲の準太（横山）堅川治右衛門（高井）妻お貞、三太女房おせつ（花園）甚兵衛娘おつか、芸妓春次（山田）百姓六兵衛、富永書記官（新庄）駕かき良助、慈善会々長長岡久（関根）駕かき要蔵（水野正）侍女お繁（橘）令嬢うへ子（水田）訓導垂井潤一（越後）学生宮崎義三（荒井）工夫源太（佐川）学生野口良一（田島）令嬢おかよ（中川）百姓佐十（新井）小間使お梅（立花）学生川口宗次（大木）百姓惣太（岡本）令嬢あい子（藤村）同きく子（安井）工夫三蔵（高尾）百姓與一（近藤）同治助（梅本）村岡不二太、法学士唐澤新助、工夫捨吉（藤澤）

【典拠3】久保田万太郎「明治四十年の日記」（「太平楽」一巻一号、大正六年七月二十七日）

七月二十日（土曜）

朝、『武蔵野』を読む。「おとづれ」が何ともいへずよし。

午後、萩野と建部が来る。今日は高等商業の試験の結果　わかる日、誘はれて一しよに官報を見に行く。

夕方から、大場と二人で本郷座へ行く。狂言は鏡花の『風流線』。

喜多村［村］の龍子はこの役者が鏡花をよく理解してゐるからこそ出来る役だ。鏡花と喜多村とは親交があるのださうだ。青木の工学士水上規矩夫はい、役だ。いふことが一々気に入つた。大した役ではないが磯野の堂守が出色の出來。親愛なる越後の垂井訓導はどうしたのかちつとも意気が上らなかつた。藤澤の村岡不二太と唐澤新助、ともによし。世間では下直にとり扱つてゐるけれど、私はこの人が大好きだ。水野の堅川昇は不思議だつた。

【注記】

「年譜」では、利倉幸一編著『続続歌舞伎年代記 坤の巻』（演劇出版社、昭和五十四年十二月一日）に拠って記したが、その後「泉鏡花と演劇」（『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十五日）の「「鏡花もの」上演の諸相㈢―一回のみの上演―」の「その七」に述べたところに基づき、場割、配役を追加し、久保田万太郎の当時の日記により観劇のことを補った。この記述が四十年当時そのままであるのかどうか、検討の余地はあるが、観劇の日と同行者とを誤る可能性は低いと考えられるので、登載しておく。

また「泉鏡花と演劇」では、番附その他に「佐藤紅緑脚色」とあるのを、紅緑自身の言により、実際は本作上演を強く望んだ喜多村が原作者鏡花と相談の上で脚色したものであったことを述べたし、大正二年四月には、金沢の第四福助座において新派の今枝恒吉一座による「風流線」上演が予告されたものの、他の演目に搗き替えられて、鏡花の生地での上演が実現しなかった経緯についても記したので、委細は『泉鏡花素描』をご参看いただきたい。

典拠3の久保田の日記の掲載誌「太平楽」は、田村寿二郎（歌舞伎座をはじめとする市内の大劇場を差配した田村成義の息）を中心とし、大正五年に発足した「句楽会」同人の雑誌で、創刊号目次あとの「句楽会連中」に、作家では久保田万太郎のほか、小山内薫、田村西男、長田幹彦、俳優では喜多村緑郎、河合武雄、福島清、花柳章太郎、劇評家では岡村柿紅、川尻清潭などの名前が見える（日本近代文学館蔵本による）。B六判の薄い小冊で「発行人が東京市芝公園九号ノ二野村久太郎となっているが、これは「新演芸」の発行元玄文社と同番地だから、玄文社が編集印刷を引き受けたのであろう。」（戸板康二『久保田万太郎』文芸春秋、昭和四十二年

十一月二十五日）との解説がある。おそらく当時「新演芸」の主幹で句楽会の中心でもあった岡村柿紅の肝煎りにより発行されたものと思われる。

句楽会および「太平楽」については、のちに会に加わった吉井勇「俳諧水鳥記」（『婆娑風流』岡倉書房、昭和十年七月十八日）、同「太平楽」（『洛北随筆』甲鳥書林、昭和十五年四月十日）、花柳章太郎「句楽会前後」（『がくや絣』美和書院、昭和三十一年十月二十日）、戸板康二「句楽会」（『演藝畫報・人物誌』青蛙房、昭和四十五年一月二十五日）に、とりどり述べられているのが参考になる。

当年の万太郎は十九歳、慶応義塾普通部の四年生であった。このとき同行した「大場」は大場惣太郎（明治二十三年一月十九日生、昭和三十七年十月十日歿、享年七十三）。俳号を白水郎、また縷紅亭の別号もある彼は「久保田君のこと」（好学社版『久保田万太郎全集』「月報」三号、昭和二十二年五月二十日）で、

　中学の一年から数へて四十何年になるつきあひの、友達とはいふものゝ、ものを書くことも、俳句をつくることも、常に先達であり師匠であつた万太郎、しかもその身辺のいろ〳〵の事情についても、知り過る位知つてゐた私である。

と述べているほどの親友であり、同じ「月報」の「編輯委員から」には「明治三十六年久保田先生が浅草の学校から錦糸堀の中学へ入られた時の同級で、先生が錦糸堀から慶応普通部へ転校されると、大場氏も亦そのあとを追つて普通部へ行かれたのである。それ程古いおつきあひなのである。」との注記がある。さらに注せば、「浅草の学校」は東京市立浅草尋常高等小学校、「錦糸堀の中学」は東京府立第三中学校である。

慶応の後輩小島政二郎（「万太郎の俳句」『俳句の天才、久保田万太郎』彌生書房、昭和五十五年六月十日）は、小島が「中学の一、二年の頃」、友人と俳句会に出席したおり、「いつも最高点を取るのは久保田暮雨と大場白水郎の二人だった。この二人とは、私達は五つぐらい年下だったが、いつもいつも余り鮮かな最高点振りに驚異の目で仰ぎ見ていた。」との回想を残している。

万太郎の自筆年譜に当る「明治二十二年――昭和三十三年……」（初出「私の履歴書 久保田万太郎」「日本経済新聞」昭和三十二年一月十二日―二十六日付・各十二面）の大正八年の項に「六月、喜多村緑郎の媒酌で、子供の時分からの友だち大場惣太郎養女京と結婚した。」とあり、のちに鏡花夫妻が「お京さん」と呼んで可愛がった万太郎夫人は、本名谷村京という芸妓で、久保田家の要望により妓籍を離れ、大場の母れんの養女として入籍後に嫁いだので、正しくは大場の義妹、つまり白水郎と万太郎は義兄弟になったのである。白水郎の逝去は万太郎の亡くなる前の年だったが、その死に際し「十月十日、白水郎逝く」として「露くらく六十年の情誼絶ゆ」（『流寓抄以後』文芸春秋新社、昭和三十八年十二月一日）の句を手向けた。

白水郎には、大正五、六年ごろ、谷中清水町の自宅へ、万太郎に連れられ、小村雪岱とともに訪れた鏡花とのエピソードを前置きに、その俳句について述べた文章（「泉鏡花」「俳句研究」五巻七号、昭和十三年七月一日）があり、万太郎を介しての鏡花との交流が認められる。

「風流線」の幕開時間は、初日は三時開き、二十三日から場割の変更があり、正四時開き、終幕「巨山秘密室」は十時からだった。

明治三十九年に大阪の成美団を引揚げて十一年ぶりで東上、本郷座を根城に、六月の「やどり木」（柳川春葉作）を皮切りとして、十月の「侠艶録」（佐藤紅緑作）の成功により「帰り新参」の地位を一挙にして確立した」（柳永二郎『新派の六十年』河出書房、昭和二十三年十二月二十五日）喜多村緑郎が、東京における「鏡花もの」の第一作に選んだのが「風流線」だった。

東上後の「風流線」以外の演目は、もっぱら佐藤紅緑の脚色に恃むところが多かったのだが、本作は親炙する原作者鏡花と相談の上での公演であって、その意

気込みの旺んであったことは容易に察しられよう。万太郎の日記に「鏡花と喜多村とは親交があるのださうだ。」と記されているごとく、両者の親密な関係は芝居好きの中学四年生の耳にも届いていたのだった。

後年、吉井勇が往時の本郷座の思い出を対話体で綴った「劇場の追憶」（前記『婆娑風流』）に「泉さんの「風流線」の河童の多見次と云ふ役」、「如何云ふ訳だかこの喜多村の河童の多見次だけが、くつきりと浮き出すやうにあたしの目に残つてゐます。」と述べており、万太郎より三歳上（当時二十二歳）の吉井も、この初演の舞台を観ていたのである。

「日記」中、堂守役の「磯野」は磯野平二（次）郎（明治三年十二月東京生れ）、川上音二郎一座で初舞台ののち、高田実の門下となった役者。垂井訓導役の「越後」は越後源二郎（生歿年未詳）、同じく川上一座に加わったのち、水野好美の奨励会に移った。いずれも達者な脇役で、万太郎の好みが窺える着眼である。

万太郎と喜多村との面識は、大正四年三月本郷座「日本橋」初演の際、原作の版元「千章館発起の連中」が催された時、春陽堂「新小説」の編輯のほか、千章館にも関係していた本多直次郎（嘯月）に誘われて連中に加わり、観劇の幕間に楽屋へ行き、鏡花から喜多村に引合されたのが最初、という（「喜多村にはじめてあつたとき」「新演芸」七巻十号、大正十一年十月一日。鏡花とはすでに二年前の大正二年六月、喜多の能舞台において生田長江の紹介で面識を得ていた）。またこの時、芝居茶屋で同じく本多から小村雪岱にも引合された（「亡友追懐　小村さん」「オール読物」十巻十二号、昭和十五年十二月一日）ので、万太郎と喜多村、雪岱との縁は「日本橋」初演を機として生じたのであった。

なお、「喜多村にはじめてあつたとき」に、

『風流線』『婦系図』『白鷺』。——それらの書下しを中学時代においてわたしは見た。——『風流線』の龍子と河童の多見次に、『婦系図』のおつたに、『白鷺』の小篠に、わたしはこと〴〵く感心した。文句なしにこと〴〵く感心した。

と記すように、その後の「婦系図」（新富座・明治四十一年九月）、「白鷺」（本郷座・明治四十三年四月）の初演も観ているのであるが、「風流線」のように具体的な日にちは判らない。

鏡花歿後の昭和十五年、万太郎は三十三年前に観た「風流線」を自ら脚色することになった。十月五日初日（―二十七日）の明治座公演の一番目がそれで、万太郎単独ではなく、岡田八千代、阿木翁助との共同脚色、伊藤熹朔装置、小村雪岱意匠考証の四幕。配役は、河童の多見次＝喜多村緑郎、工夫力松・巨山五太夫＝小堀誠、小松原龍子＝英太郎、矢島要五郎＝武田正憲、お妻＝河合武雄、堅川昇＝野澤英一、捨吉＝藤村秀夫、村岡不二太＝伊井友三郎、巨山美樹子＝水谷八重子、ほかである。この再演が本郷座初演を観た久保田万太郎と岡田八千代の二人によって脚色されたこともまた奇しき縁というべきだろう。

「補訂（十八）」の昭和十四年四月の項にも一部記したが、逝去の翌年昭和十五年は新派の「鏡花物全盛」（坂部三十郎「新派の大角力」「演芸画報」三十四年八号、昭和十五年八月一日）の年で、「日本橋」（二月・東京劇場）を皮切りに「通夜物語」（三月・明治座）、「瀧の白糸」（同・東京宝塚劇場）、「つや物語」（四月・大阪中座）、「婦系図」（五月・明治座）、「つや物語」（六月・名古屋御園座／中国九州巡演）、「歌行燈」（七月・明治座）、「白鷺」（同・新橋演舞場）、「瀧の白糸」（同・大阪歌舞伎座）、に続き、本「風流線」はその棹尾となる公演だった。

鏡花最大の長篇「風流線」は、万太郎の二歳上の阿部章蔵が、主人公水上規矩夫と「黒百合」の千破矢瀧太郎にあやかって水上瀧太郎と名乗ったことで知られるが、谷崎潤一郎にとってもまた忘れがたい作品だった。谷崎における「風流線」は、大正期以降その映画への傾注の中に認められ、作品として具体化したのは大

正九年十二月の「葛飾砂子」（大正活映）のみに止まったが、これより三年前の「活動写真の現在と将来」（「新小説」二十二年九巻、大正六年九月一日）では、

　写真劇が、いかなる場合にも写実らしいと云ふ事は、同時に其れが芝居よりもつと写実的な戯曲にも、もつと夢幻的な戯曲にも適して居る事を証拠立てる。写実劇に適する事は説明する迄もないが、例へば全く芝居にする事の出来ないダンテの神曲とか、西遊記とか、ポオの短篇小説の或る物とか、或ひは泉鏡花氏の「高野聖」「風流線」の類（此の二つは嘗て新派で演じたけれど、寧ろ原作を傷つけるものであつた。）は、きつと面白い写真になると思ふ。

と述べ、さらに国産の「フィルム」の「低級な物が多い」現状を打開するため、

　猶ほ一層高踏的なものとしては優秀な作家の作を借り受けて、それから芸術的なフィルムを製作して行きたいと思ふ。例へば泉鏡花氏の作物の如き、その何れもがよい場面を持つて居るが、中にもあの「風流線」など場景の組合せ方の如何によつては、確かによい写真になるものだと思ふ。（「改造を要する日本の活動写真」「読売新聞」大正九年五月九日付・十面。圏点は原文）

と重ねて述べていたし、昭和に入っても、

「葛飾砂子」は、いふまでもなく泉鏡花さんのものであるが、これも殆ど映画といふものを見られないあのひとが御覧になつて、大変結構ですと賞めてもらつたぐらゐだから、おそらく、その後もたくさん映画化されてゐるあのひとのもののなかでも、いまでも映画としては一番すぐれてゐるのではないかと思つてゐる。泉鏡花さんといへば、あのひとの「風流線」などは脚色者、監督、俳優その他すべての条件が揃つてゐさへすれば、映画にすると非常に面白いものになるだらう。しかし、日本の映画界がいまのやうな有様では、ちよつと手をだすことはむづかしいだらう。（「映画への感想―「春琴抄」映画化に際して―」「サンデー毎日」十四年十七号〈春の映画号〉昭和十年四月一日）

と、「葛飾砂子」の自信とともに、再三「風流線」映画化の可能性への期待を語っていた。

　この時から八十五年経った現在でも「風流線」の映画化はいまだ実現をみていないが、谷崎の映画化への志向と期待とが一貫していたことは銘記しておきたい。

大正七年（一九一八）　戊午　四十六歳

七月　十五日、外務大臣後藤新平の文士招待会（於麻布狸穴の満鉄社宅。開会午後六時、散会午後十一時）に出席した。会場へは俥で向ったが、途中赤坂御所近くで有島生馬、里見弴の乗った自動車に遇い、三人同乗して到着した。文士側はほかに、芥川龍之介、阿部次郎、久米正雄、田中純、長田秀雄・幹彦、和辻哲郎、外相側は長尾中管局長、永田警保局長、水野内相、石本恵吉、鶴見祐輔・同夫人愛子、後藤一義（新平子息）らが会した。当日の欠席者は尾崎敬義（衆議院議員）のほか、在京でなかった有島武郎（熱海）、徳田秋聲（伊香保）、谷崎潤一郎（片瀬）らだった。会席では、後藤外相の向い、永田警保局長と水野内相との間に座った。里見弴によれば、この席で鏡花から芥川龍之介と久米正雄を紹介され、里見は両人と初めての面識を得たのだという。

【典拠1】「◎森田思軒に叱られたと　水野内相の話」（「時事新報」大正七年七月十六日付・九面）＊活字の大きさは均等とした。

　▽昨夜の後藤邸文士招待会で―出席したのは七名の文芸家

十五日は午前から宮中に元老会議が開かれ、午後からは首相官邸に臨時会議が開かれる、夜に入つては政友会幹部の会議があると云ふ

★風雲急　なる時であるが既報の後藤男文士招待会は午後六時から麻布狸穴の満鉄舎宅で開かれた、雨を含んだ涼しい風が暮近い木立を静かに渡る頃真

先に乗込んだ自動車からは之れは又珍らしく思はれる有嶋（ママ）生馬氏が令弟の里見弴と泉鏡花と共に現はれて玄関に立つ、続いて長田秀雄、長田幹彦［、］阿部次郎、田中純、和辻哲郎、久米正雄、芥川龍之助（ママ）の諸氏が孰れも白地に

★紹羽織　の軽装で参着して時を待つ、官邸から自動車を駈つた後藤男、次いで水野内相、長尾中管局長、青嵐宗匠永田警保局長、鶴見氏の親戚である三井の石本恵吉男が、之れも申合せた様に和服姿で来る、是等の諸氏と招待役の鶴見氏と、氏の夫人愛子と後藤男の令息一蔵氏とを加へて、庭に面した休憩室から一同食堂に移つたのは雨の降り出（だし）た七時過ぎ

★主人役　も来客も厳めしい挨拶を一切抜きにして食事が始まる、永田局長の俳句談、長尾半平氏の著書『禁酒に関する感想』から水野氏が大学時代小説を書いて森田思軒から叱られたと云ふ余り人の知らぬ告白談に人々の耳を傾けさせ、後藤男の相馬事件に移つて主客歓を盡し散会したのは

★十一時を　過ぐる頃雨を吹く風は冷たかつた、当夜列席すべき代議士尾崎敬義氏と熱海に居る有馬［島］武郎氏と、伊香保に保養中の徳田秋聲氏と片瀬に居る谷崎潤一郎氏は欠席した

【典拠2】「〇狸穴の文士招宴」（「報知新聞」大正七年七月十六日付・七面）＊活字の大きさは均等とした。

日中から持越しの上々機嫌で　外相の心もとない文芸談

後藤外相の愛婿鶴見祐輔氏が洋行前に一盞傾け度しとの触込みで大学時代に知つた十三四名の文士連に案内すると旅行中の徳田秋聲、有島武郎、谷崎潤一郎の諸氏が欠席せる以外の文芸評論家阿部次郎、田中純、和辻哲郎、小説家有島生馬、長田秀雄、同幹彦、芥川龍之介、久米正雄、里見弴及び

◇鶴見夫人　の崇拝せる泉鏡花の諸氏は十五日午後六時半から麻布狸穴なる後藤男の仮住居（ずまる）に参集した文人以外では末日会の代議士尾崎敬義氏、吏青嵐の永田警保局長、若い頃『禁酒』と云ふ小説？を書いて文名？を馳せた長尾半平氏まッた大学生の時に是も小説やうのものを書いて森田思軒居士に甚（ひど）く叱られたことのある

◇水野内相　と後藤男の親戚なる三井鉱山の石本男、後藤二世の一蔵君、夫（それ）に鶴見氏は慶（ママ）子夫人を携へて出席し最後に後藤男は絽の紋附羽織に袴をつけ自働車で駆けつけた、主客共に浴衣がけの寛いだ装束（なり）で自働車は後藤、水野、永田三氏の外に文芸家では

◇有島、里見　兄弟のが只一台、多くは俥かテクで本当の散歩の序に寄つて見たと云ふ風で談話も最初から打解けて書生の昔に帰り七時過洋風の食卓が開けても六ケしい挨拶とては無く鶴見氏が主人役の因果で『みんな好く来て呉れた』とぶッきら棒に一言投つけたが客側からは之に応じて謝辞を述べるほど

◇暑苦しく　は無い、恰も此日元老会議に存分メートルを上げて時局を一気に押出して来た後藤外相は日中から持越しの上機嫌を益（ますます）上（うは）づらせ西（ママ）織剛清の肩を持つて躓いた相馬事件の虫干しから始めて結局『事実は小説よりも奇なりで……』と

◇無器用に　文芸談へ漕ぎつけるなどは固（もと）より陶庵侯を真似ぶ柄でも無いから文芸談は相馬事件以上に発展せず招かれた文士連も徹頭徹尾雑談で持切り午後八時二十分宴が撤せられて猶ほ二時間余り折柄の雨声を聴きつ、語り更かした

【典拠3】「後藤内（ママ）相の文士招待会」（「文章倶楽部」三巻十号、大正七年十月一日）＊写真のキャプションのみ引用。□は欠字。

向つて右より後藤一蔵、田中純、芥川龍之介、有島生馬、後藤外相、長尾中管局長（後藤氏と長尾氏との間に阿部次郎氏が隠れて居る）。立つて居るの

が里見弴、石本恵吉男。向つて左、手前より鶴見夫人、長田幹彦、永田警保局長、水野内相（永田氏と水□氏との間に泉鏡花氏が隠れて居る）。立って居るのが和辻哲郎、長田秀雄、久米正雄、鶴見祐輔。

【典拠4】里見弴「大好きな久米君」（「新潮」四十巻一号、大正十三年一月一日。のち『自然解』新小説社、昭和九年八月二十八日、に収録）＊引用は初出。原文の圏点を省く。

久米君は、私の最も近しい、何んでも心置きなく話せる友達だ。と云つても、決してさう古くからの知合ひではない、大正五年か六年か、はつきりしないが、なんでもその両年のうちの暑い盛の頃が（ママ）つた、今の内務大臣、当時浪人の後藤新平が、いろ〳〵蔭の綾はあつたらうが、要するに、ふとした気まぐれから、一夕文学者と会談して見ようといふ気を起した。鶴見裕輔（ママ）、尾崎敬義といふやうな人があひだにはいつて、その時分「新小説」を編輯してゐた田中純に、人選の相談を持ちかけたのだ。田中君の推薦だけに、泉先生を年頭（としがしら）として、あとは若いものが多かつた。

当時半蔵門の近くに住んでゐた私は、自働車を奮発して、下六番町に生馬を誘ひ、麻布狸穴へ向ふ途中、丁度赤坂御所の表門の近くを、幌を掛けて行く俥上の人が、泉先生らしく見えた。なほ近寄ると、他に類のない香の図の紋付だつたので、すぐに自働車を停め、そこから三人同乗して行つた。狸穴は何かの官邸だつたと覚えてゐる。してみると、前に浪人だつたと云つたが、ひよつとすると鉄道院の総裁時代だつたかも知れない。兎に角、その官邸に行つて、玄関の突当りの控室のやうな所で、――なんと不思議ではないか、私は泉先生の御紹介で、久米君、芥川君と、初対面の挨拶を交したのだ。

『さうですか、私はまた、疾うにあなた方は、御懇意た［な］ことゝばかり思つてゐました。へえ！　さうですか、おはじめてゞすか。』

と、紹介者の泉先生が、驚いていらしつた程で、私達は疾うに会ふ可くして、会ふ機会のなかつた形がある。その夜の久米君に就いては、はつきりした印象が残つてゐない。（…）何しろ私は、ひどく忘れつぽい性だから、僅か六七年前の事だが、古い話にはあまり責任が持てない。

【注記】

「年譜」は典拠3と芥川龍之介「年譜」に拠って記したが、典拠1の新聞記事により、開会閉会の時刻、参会者、欠席者を補い、典拠3のキャプションを見落していたので、これにより座席順を補った。また「年譜」本文の末尾に「この席が芥川との初対面カ。」と記したが、典拠4の里見の文によれば、本席よりも前に鏡花と芥川久米とはすでに面識があったごとくである。今後傍証を索めることとし、右の「初対面」の一文を削っておく。

典拠4の里見の文は「人間随筆（其二）最近の久米正雄氏」の八篇の冒頭に載る。他に、芥川龍之介、田中純、菊池寛、近松秋江、直木三十三、中戸川吉二、徳田秋聲が文を寄せ、岡本一平の似顔絵が挿入されている。この会の文士側の人選が、当時「新小説」編輯担当の田中純であったことを明かしているが、択ばれた者は（欠席者も含めて）当代の新進中堅の作家が中心であり、当年四十六歳の鏡花は出席者のうちの最年長であった。

典拠2「報知新聞」報は、典拠1「時事新報」の記事とほぼ同じ内容であるが、文中「鶴見夫人の崇拝せる泉鏡花」との記述が注目されるので、典拠に加えた。田中純ならば鏡花を選んでも当然であるが、この人選は鶴見夫人愛子（後藤新平長女）の希望を反映したものであったと考えられる。鏡花の愛読者はこのようなところにもいたのである。

なお、典拠3には、写真とともに「寸鉄大臣の肺腑を貫く」と題する文が添えられていて、写真の中に「颯爽たる風貌をして、大膽な、聡明な、何となく日本

人離れのした我が芥川龍之介」の姿を見出し、

> 文学好きの水野内務大臣は、若い時分小説を書いた時の事などを語り出で、「わしは、今でも小説が書けるやうな気がするよ。」とか何とか云つた。すると、芥川氏が、「小説が書ける位でなければ、内務大臣はつとまりません、内務大臣が出来る位でなければ、小説は書けません。」と一本まゐらせた。此の警句を解剖して見ると、現に小説を書きつゝある小説家は大臣になれる丈けの実力があるが、小説の書けぬあなたは大臣になつてゐたつて、ろくの大臣ではありませぬぞと云ふことになる。これは又一段と痛快ではないか。
>
> （圏点は原文）

と結んでおり、『羅生門』の出版記念会（大正六年六月二十七日）から約一年後、当時の新進作家の中で最も注目を集めていた芥川の位置が良く解る文章である。

芥川は、七月二十二日付薄田泣菫宛書簡で、

> 今日の新聞に出てゐる後藤外相の晩餐会の席上で里見君が三鞭酒と白葡萄酒と間違へたと云ふのは誤聞です　あの会は色々な意味で面白かつた　誰かあすこにゐた連中が小説に書くと好いと思ひます

と会席の模様を書き送っているが、この「新聞」が何であるのか、今のところ記事の詳細を把捉できていない。

鏡花と芥川との関係については須田千里氏の解説（『芥川龍之介新辞典』翰林書房、平成十五年十二月十八日）に詳しい。交流の始まりは、鏡花「自筆年譜」の記述をもとに大正九年六月ごろから、とする場合が多いが、少なくとも両者の面識は本項大正七年七月まで遡りうることを確認しておきたい。「補訂（十一）」において、大正七年一月十四日付久米正雄宛書簡に、春陽堂刊『紅梅集』（大正七年一月一日）収録の「無憂樹」を読んで作った句（七句）のあることを指摘したが、大正七年が一つの目安になると思われるので、なお探索を続けたい。

「時事新報」「報知新聞」以外の報では、「東京朝日新聞」に「後藤外相の愛婿鶴見祐輔氏の膽煎り（きもい）で催された文士（末日会員）招待は昨夜午後六時から麻布狸穴の後藤外□私邸で開かれた」（「後藤男邸で文士招待」七月十六日付・五面。□は欠字）とあり、招待の文士が「末日会員」であるむね注記がある。

「末日会」は、その幹事であった田中純（「文芸家の集まり（其四）末日会」「読売新聞」大正七年八月十一日付・七面）によれば、初めて開かれたのが七年一月三十一日（於「鴻之巣」）、発起者は大山郁夫、生田長江、室伏高信、田中の四名で、三十名ほどが集まり、以後の幹事に尾崎敬義、大山、有島武郎、田中の四名が推挙され、その後三、五、七の隔月、東洋軒（新橋駅楼上）で開催してきた、という。「毎回出席されて居る人は尾崎敬義、小村欣一、植原悦二郎、鶴見祐輔、若宮卯之助、田中王堂、大山郁夫、吉井勇、阿部次郎、岩野泡鳴、生田長江、有島武郎、同生馬、里見弴、長田秀雄、同幹彦、室伏高信、与謝野寛、同晶子といったやうな方で、政治家も、実業家も、官吏も、文士も一緒の会合」であり、「徹頭徹尾社会上の実際問題に関する研究的な雑談」をする会だと述べている。十五日当日出席の文士十名のうち、末日会の者は過半の六名であった。

七月十二日付「東京朝日新聞」（五面）には、右の末日会へ「後藤外相が出席」の予定、と報じられたが、末日を待たず、十五日に末日会のメンバーを含む文士招待会が実現したことになる。

この文士招待会のことは、肝煎りであった鶴見祐輔の『後藤新平伝　国務大臣時代後期　下』（太平洋協会出版部、昭和十九年四月二十五日）の第七章「西比利亜出兵」の「文士との清談」の節にも述べられている。

なお、陪席の石本恵吉（明治二十年十二月十五日生、昭和二十六年二月六日歿、享年六十五）は、かつて陸軍省で森鷗外の上司だった石本新六（中将・男爵）の次男。父の死後二十六歳で襲爵し、当時は三井鉱山（本店）に勤めていた。鶴見祐輔の姉

敏子の嫁いだ広田理太郎の長女シズヱ（のち加藤姓）と結婚、祐輔の姪の夫であり、祐輔は義理の叔父に当る。

昭和八年（一九三三）癸酉　六十一歳

六月　一日、浅草公園内電気館で、溝口健二監督の「瀧の白糸」（製作入江プロ、提供新興キネマ、製作者茂木芳三、撮影三木茂）が封切られた。出演は、入江たか子、岡田時彦、瀧鈴子、菅井一郎、浦辺粂子ほか。本作の完成後に、新興キネマの試写室で、鏑木清方、中村武羅夫と同席した。

【典拠】中村武羅夫「泉鏡花の作と人」（『新潮』三十六年十一号、昭和十四年十一月一日）

麹町の現在の家になつてから、二度ばかり訪ねて行つたことがあるし、一度「新潮」の座談会に出席して貰つたことがあつた。「瀧の白糸」を溝口健二氏が映画化した時、新興だつたか、松竹だつたかの試写室で見た時に会つたのが、僕が泉さんと会つた最後である。その時は鏑木清方さんと、三人だけで見たのだが、あれからもう五六年くらゐになるだらう。（…）

泉さんが大の犬嫌ひだつたことは、有名である。

「瀧の白糸」の試写で会つた時にも、どこへも、ちつとも出かけないことを話して、

「何しろ犬と、自動車とが恐ろしいものだから。」

といふことだつた。――しかし、そればかりではなく、既にあの時分から健康も余りすぐれた方ではないやうに、見受けられたのである。

いかにも文人らしい面目の、正直な、いい人だつた。

【注記】

典拠は発表年月からも判るように、かつて「新声」「新潮」の編輯者として接した中村武羅夫の鏡花追悼文。逗子滞在期、「新潮」誌上に載った鏡花の談話「おばけずきの謂れ少々と処女作」（明治四十年五月）、「ロマンチックと自然主義」（明治四十一年四月）等は中村の取材に基づくものである。引用部分の前には、取材に訪れた中村に対し「自然主義のヤツ等が、おれに飯を食はせない。」と「声を慄はせて激語したのを、僕はよく覚えてゐる。」という有名なエピソードが記されている。「「新潮」の座談会」とは、中村が司会を務めた「新潮合評会 第二十三回（文壇思ひ出話）」（『新潮』四十二巻四号、大正十四年四月一日）のことであろう。

すでに、拙稿「泉鏡花と演劇」（『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十五日）の「映画というメディア」の節にも述べたように、溝口健二監督の「瀧の白糸」は大衆娯楽映画を量産した新興キネマにおいては異色の、芸術性の高い作品として評価された。新興キネマは松竹傘下の映画会社であり、「新興だつたか、松竹だつたか」という中村の言葉は、こうした事情を反映している。

新興キネマの本社は京橋区八丁堀二丁目三番地にあったので、試写室も本社内にあったかと思われるが、試写の行われた日付ともども、特定するに至らない。

昭和九年（一九三四）甲戌　六十二歳

一月　一日発行「文体」（第二巻第一号）裏表紙の文体社「刊行予定書」の中に「長篇小説 山海評判記」があった（同日発行の「書物展望」第四巻第一号の広告も同様）。三月号（同第三号、三月一日発行）の「出版だより」には「只今盛んに校正中です。」と報じられ、四月号（同第四号、四月一日発行）の「近刊予告」では「四月下旬」の刊行予定、「新菊判・美装」「番号入・限定版」、「定価未定」、同「四月の新刊」では、「四六判」とされたが、未刊に終った。編修資料中の「山海評判記」校正刷はこの本のものカ。

【典拠1】「刊行予定書」(「文体」二巻一号、昭和九年一月一日)

新菊判美装
上質紙番號入
定價金二圓
送料二十錢

英文學
隨筆集 **爐に凭りて** 平田禿木著

我が英文學界の耆宿で且つ隨筆家として文壇に獨歩の地歩を占められて居る平田禿木氏の小品隨筆評論を蒐めて一卷としたもの。裝幀亦他社の追隨を許さゞる本社一流の清新無類なものにて、組版・印刷・用紙の鮮麗と相俟つて、愛書家の絶讃をかち得べき美書である。英文學を愛する人々はもとより江湖讀書子の新春の書齋に心から一本をお奬めする。

刊行予定書

久保田万太郎著　戯曲集　かどで
荻原井泉水著　感想集　青天の書
瀧井孝作著　創作集　慾呆け
泉鏡花著　長篇小説　山海評判記
犬養健著　感想隨筆集（書名未定）

既刊

久保田万太郎著　句集　もゝちどり
岩佐東一郎著　詩集　神話　定價一・六〇 送料一六
横光利一著　小説　花花　定價一・六〇（全部賣切）

◇微力ですが、眞に書物としての美を、良さを備へた本を、せいぐ出版したいのが望みです。
◇主として文藝書を、裝幀・體裁すべてに念入りに優れたものにして、著者も讀者も出版者も、喜びたいと存じます。
◇番號入りの限定版で、番號御希望のお方は成るべく多く記入の上、葉書で本社宛申込んで下さい。いつも同じ番號御希望のお方はその旨お書添へ下さい。書店注文でも御希望番號の書を差上げます。
◇本社の出版物は書店へは注文以外出しません。新刊の都度御通知しますから御住所御姓名御一報下さい。
◇横光氏の『花花』は僅か半月で花花しく賣切、本社に一冊もありません。『爐に凭りて』は出來次第御通知します。

東京市京橋區新富町三ノ七
文体社發行

★

東京市京橋區新富町三ノ七
書物展望社發賣
振替東京一五五三三番

【典拠2】「出版だより」(「文体」二巻三号、昭和九年三月一日)

◇三月の新刊は瀧井氏の創作集でこれは趣味家として知られた谷口喜作氏の装幀。続いて荻原井泉水氏の感想集『青天の書』泉鏡花氏の『山海評判記』久保田万太郎氏の俳句集『もゝちどり』竹友藻風氏の随筆集『冬扇帖』等を只今盛んに校正中です。

【注記】

「年譜」では「書物展望」四月号の広告を典拠としたが、四月よりも早い時点の、版元である文体社の予告を見逃していたので追加する。

また「年譜」には末尾に編修資料(岩波書店蔵)に校正刷のあることを記したが、その後、田中励儀氏編『初稿 山海評判記』(国書刊行会、平成二十六年七月二十五日)が刊行され、同書「別冊解説」の「解題」に校正刷(再校および三校)についての詳しい説明があるので委細を参照されたい。これによれば、三校には「鏡花全書」というゴム印が捺されているとのことだが、文体社版は「山海評判記」の作品名で予告が出ているから、三校は、これ以降に別の何らかの企画があったことを推測させる資料である。

「刊行予定」に掲げられた鏡花以外の書目のうち、久保田万太郎の『かどで』は昭和九年二月十三日(限定八〇〇部)、同じく『もゝちどり』は同五月二十日(限定三〇〇部)、瀧井孝作『慾呆け』は同四月十一日(限定七五〇部)、荻原井泉水の『青天の書』は同四月十五日(限定一〇〇〇部)にそれぞれ刊行されており、犬養健と鏡花の本だけが未完に終った。

「文体」の「山海評判記」の広告は四月号まで掲げられ、五月号以降、名が消えている。文体社の刊行書は前記のとおり並製でも限定出版であり、そのうちさらに少部数の特製版が誂えられるのを常としていたのだが、未刊に終ってこの特製版もまた幻となったのである。再校まで進み「四月下旬」、「四月の新刊」と広告されながら、なぜ刊行に至らなかったのか、その事情を詳らかにしえない。

なお、同時期に高村光太郎、横光利一責任編輯の『宮澤賢治全集』全六巻の予告も掲げられているが、これも未刊となり、同年十月本郷の文圃堂から全三巻として刊行された。

［新たな項目］

明治三十四年(一九〇一) 辛丑 二十九歳

五月 四日、夜に横寺町を訪ね、このたび千葉へ赴任する瀧川愚佛の送別会(於角田竹冷宅、午後三時開会)から帰る紅葉を待った。

【典拠】尾崎紅葉「十千万堂日録」(岩波書店版『紅葉全集』第十一巻、平成七年一月二十六日)＊傍点、ふりがなは原文。

（明治三十四年四月）廿九日　睡到正午。雨。胃患の為に、慵し。竹冷子来り、俳諧年表製版の事と、愚仏子千葉地方裁判所、検事正と成りて赴任に付、其の送別会を開くの件を議す。（…）

卅日　快晴。正午起、（…）此朝郵箋にて、愚仏子送別句会を竹冷氏宅にて、四日の午後三時より。（…）昨日皇孫降誕の号外有り。（…）

（明治三十四年五月）四日　晴。九時起。（…）此日三時より竹冷宅に、愚仏子送別句会有り。大川に行き撮影し春翠堂に寄り、ルミエル二打、マリオン二打を求め、竹冷子に行く。先着第一。其角「進上に」嵐雪「秋のから錦」の対幅短冊を見る。愚仏夫妻、烏黒、松宇、黄雨、無黄、四丁、知十、飯人来会。かなめや余の跡を追ひ来訪、手彫の鍾馗をおくる。四時迄撮影を試み送別、御降誕二句を作り。晩食、蓮（初芽）飯、鹿の味噌付。烏黒子に海棠の墨画席上を請ひ。十時、春翠堂に寄り顕像せしめしに、好結果。夜に入り、雨ふり出でければ、冷氏車にて送らる。帰れば鏡花在り。只今笹川より岡田、武内同行に付来れとの文来在りければ、その車にて駆付く。小えん来る。勘定六円許、武内と分頭。十二時出づ。微雨。帰れば本降となる。明日伊豆に出発せんとす。例の降性又中（あた）る。不在中東儀子来る。

【注記】

典拠の示す通り、瀧川愚佛の送別会は、角田竹冷との間で、四月二十九日に初めの相談があり、三十日に日時と場所の通知が届いた。角田竹冷（安政三年五月二日生、大正八年三月二十日歿）に関しては「補訂㈢」の明治三十三年三月十六日の項に述べたことがあるので繰り返さないが、明治二十八年十月五日の秋聲会の発足も、神田猿楽町二十番地の竹冷宅（聴雨窓）で行われたのである。

以下、当日の参会者について略述する。

瀧川愚佛（安政五年十月二十六日生、昭和十九年八月一日歿）は、江戸麻布生れ、本名長教。専修学校法律科卒業後、検事として京阪の各地に赴任、のち検事正に栄進した。

送別会に参じたのはいずれも秋聲会の会員で、川村烏黒（天保九年八月八日生、明治三十九年十二月二十九日歿）は、江戸青山生れ、本名応心。愚佛と同じく判事を務め、三十一年に大審院判事を退いてから画俳に専心し、枯木庵、広郷、休翁、雨谷などの別号がある。伊藤松宇（安政六年十月十八日生、昭和十八年三月二十五日歿）は本名半次郎。長野から上京して第一銀行に勤め、正岡子規、内藤鳴雪ら日本派とも組んで新派の俳句を推進した。川村黄雨（文久三年六月二十九日生、昭和十年六月十五日歿）は、江戸赤坂生れ、本名種次。長らく貴族院に勤務。森無黄（元治元年三月六日生、昭和十七年三月二十六日歿）は、江戸駒込生れ、本名貞二郎。東京経済雑誌から東京朝日新聞社に転じた。鵜澤四丁（明治二年二月九日生、昭和十九年一月一日歿）は千葉安食生れ、本名芳松。鉄道事務の傍ら、大下藤次郎に水彩画を学んだ。岡野知十（万延元年二月十九日生、昭和七年八月十三日歿）は北海道日高国様似生れ、本名敬胤、別号正味。小学校教師、基督教伝道師、新聞記者等を経て上京後、「しからみ草紙」「女学雑誌」「毎日新聞」等に俳話を載せて俳壇の注目を浴びた。鏡花の初期作品「窮鳥」の「根室毎日新聞」への発表（明治二十六年九月―十月カ）に際し、当時「風片」と号していた知十の斡旋があったのではないか、とする説がある（田中励儀「新進作家時代の鏡花」『泉鏡花文学の成立』双文社出版、平成九年十一月二十八日）。佐藤飯人（元治元年生、昭和二年四月二十二日歿）は越後新発田生れ、本名寛、六石と号した漢詩人。上京し皇典講究所を卒え、森槐南の日星社に加わって漢詩壇に活躍し、国学院、慶応義塾にも出講した。

「かなめや」は、中央公論社版『尾崎紅葉全集』第九巻（昭和十七年九月十五日）の柳田泉の注に「神田末広町の美術的指物師」とある（地番は不明）。「春翠堂」は、同じく「曾根真文、号金蛙、神田猿楽町写真機商」と出ている。店の地番は、猿

楽町二丁目一番地。竹冷宅と同じ町内にあったので、会の帰途、写真の現像のために立寄ったのである。曾根と紅葉はともに写真の愛好会「東京写友会」の会員であった。

「送別、御降誕二句」とは「初袷涙ふくへき袖ならす」「万代と曳く丈の菖蒲かな」で、ともに歿後の三種の句集（『紅葉山人俳句集』『紅葉句帳』『紅葉句集』）のすべてに収められている。

帰宅後、岡田朝太郎、武内桂舟の待つ笹川（牛込神楽町三丁目の料亭）へ、鏡花が同道したのかどうかは判らない。席に呼ばれた「小え（ゑ）ん」は本名村上まち、紅葉の愛妓として知られる。

「伊豆に出発」とは六日から十六日までの豆州修善寺行きのこと。四日の項に「明日」とあるのは、「日録」の認めが五日であったことによるものであろう。「東儀子」は東儀鉄笛（明治二年七月二十四日生、大正十四年二月十四日歿）。本名季治、雅楽の家に生れ、坪内逍遥に師事して文芸協会の創立に加わり、その中心俳優として活躍したほか、新劇ばかりでなく新派の舞台にも立った。

送別会の翌月六月二十二日付、在独の巌谷小波宛書簡には「愚仏子千葉の検事正に相成候に付近々秋声会員大挙して其地に一興行可致相談有之候」とあるが、この「相談」は実現せず、一年後の三十五年五月、上総成東鉱泉への療治の途次の訪問となった。紅葉が「読売新聞」（三十五年六月十七日付・一面）に寄せた「上総成東より」によれば、「十二日午後二時本所発車にて三時過千葉着」「千葉にては吾妻町なる愚佛子の借宅庵に入りて一夜を明し」、翌日の「午後三時雷雨の中を暇乞して発足。一時間余にて当地成東館に着」とある。

一方、紅葉を迎えた愚佛は、後年の三十七回忌に際しての回想文「紅葉忌に」（「木太刀」三十七巻十号、昭和十四年十月二十日）で、往時の千葉赴任に触れている。文中に岩波書店版『紅葉全集』未収録書簡二通が紹介されているので、いささか長いが以下に引用してみる。

> 紅葉君は牛込横寺町の十千万堂で逝かれたのであった。その当時私は已に東京を去って千葉県千葉町の裁判所の官舎に住まってゐたし、又私に任地を離れることは出来ぬので其葬儀に会する能はざりしを今も尚遺憾の情か（ママ）残つてゐる。其千葉に移る直前は牛込若宮町に住み十千万堂には比較的近い所であつた。されば折にふれて堂門を叩いて玄関番の鏡花さん即このごろ白玉楼中の人となつた泉鏡花先生の案内で、書斎に入りて語ることもあつたのであつた。
>
> 此頃の絵葉書のアルバムに
>
> 御招き難有拝謝仕候萬障一排参堂可致候俗事と来客と執筆とに忙殺せられ実に泣きたいやうに御座候
>
> とある春陽堂発行の南天の実を提いた葉書が挿してある。卅四（？）年一月十五日夜付でヨコデラ尾崎紅葉と毛筆書である。この招待はなんでも山妻か（ママ）手料理の晩餐に請じたのであつたかと記憶する。食好みの彼の人が茅屋の晩餐に萬障一排で来たのは、泣きたいやうな焦燥を一風変つた処で消解せうと思つたのではないかと思はるゝが、兎に角山妻の満足は申すまでもないことであつた。今一枚菊花のある葉書に、
>
> 御約束わすれられず豚肉沢山に御贈り被下御芳情奉拝謝候委細後より
>
> といふのがある。それは千葉移転後即卅五年十二月三日付である。（…）嗚呼紅葉三十七回忌。
>
> （一四　九・二六）

右の通り、明治三十四年（カ）一月十五日付、同三十五年十二月三日付の葉書二通の紹介である。これに続いて、紅葉の短冊揮毫の四句も紹介しているが、鏡花逝去の当月に草された紅葉追悼文は、両者交友のありさまを窺うに十分である。

明治三十六年（一九〇三）　癸卯　三十一歳

三月　二十四日、小栗風葉と連名で、星野麦人宛に翌二十五日午後一時より、神楽町鏡花宅で行われる門生の相談会（尾崎紅葉の病気についての衆議）の連絡葉書を出した。

九月　八日、星野麦人宛に病床の紅葉に進呈すべき見舞文を乞う葉書を送った。

【典拠】星野麦人「手紙もの語」（「木太刀」三十八巻七月号、昭和十八年七月二十日）

＊（　）内は原文。

先生の御病症は御存じの事、それに関して衆議を致度義有之候間二十五日午後一時より神楽町二丁目二十二番地泉方まで相違なく御集会被下度候也

二十四日　泉　鏡　花

（三十六年三月）小　栗　風　葉

○

先生御容体御かはりもござなく候

就ては御病床にて御覧ありたき旨申聞けに相成候間枕上に差上げらるゝ見舞の御文何かおん思ひつきなど御書添へなされ至急御進呈なし下され度くれ〴〵も申上候

九月八日　神楽町

行　事

○

此の二通は紅葉先生御発病後のものでこうした葉箋はまだ何枚かあるが、今此の二つだけをこゝに出す。

【注記】

三月二十四日付の葉書については、すでに別稿（「尾崎紅葉の死—その前後（一）—」「学苑」九三九号、平成三十一年一月一日）においても紹介したが、年譜として改めて記載する。

これに先立ち、大学病院退院後四日目の三月十八日には、川喜多不曲から紅葉の別号を冠した十千万堂出版部創立が提案され、二十三日には、久我亀石、石橋思案、巌谷小波、武内桂舟、岡田虚心、不曲の六氏が紅葉を招いて初めての相談があった。この十千万堂出版部は、紅葉全集の編輯刊行を第一の事業とし、紅葉の文業を集成するのみならず、その印税をもって家族の向後の生活を保障せんと企てるものだった。二十五日の門生による相談会は、十千万堂出版部がおもに硯友社の友人によって動き出したのに応じて、一門が病床の師紅葉に対して何が出来るのかを話し合う会だった。この会で決定した紅葉に献ずる「門生集作」は、のちに『換菓篇』と名づけられて紅葉の死の直前十月二十四日に刊行されたが、十千万堂出版部および『換菓篇』刊行にいたる経緯については別稿「尾崎紅葉の死—その前後（二）—」（「学苑」九五一号、令和二年一月一日）に詳しく述べたので、併せてご参看いただきたい。

九月八日発信中の「見舞文」の件は、当時紅葉宅の玄関番として身辺の世話をしていた山里水葉筆記「十千万堂日誌」（原本は東京都立中央図書館加賀文庫蔵）に該当する記載が認められない。

星野麦人の「手紙物語」は主宰する「木太刀」の昭和十二年より十五年にかけて断続掲載されたもので、うちわけは以下の通りである。

㈠「手紙物語（一）一葉女史」三十五巻七号、昭和十二年七月五日
㈡「手紙物語㈡一葉女史（二）」同八号、同八月五日
㈢「手紙物語 尾崎紅葉」同十号、同十月五日

㈣「手紙もの語」三十七巻八号、昭和十四年八月五日
㈤「手紙もの語」同九号、同九月五日
㈥「手紙もの語」三十八巻三号、昭和十五年三月二十日
㈦「手紙もの語　泉鏡花」同六号、同六月二十日
㈧「手紙もの語　泉鏡花（下）」同七号、同七月二十日

題名は区々ながら、㈠㈡は半井桃水からの尾崎紅葉紹介の話を謝絶した樋口一葉の手紙を日記から読み解き、㈢は紅葉とその愛妓小ゑん連名の大島太郎宛書簡（岩波書店版『紅葉全集』未収録）、㈣は呉秀三、戸川残花の麥人宛書簡、㈤は高浜虚子、大野洒竹、水落露石の麥人宛書簡、㈥は早逝した俳人酒葉月人の追悼と正岡子規、高浜虚子との交流、㈦は鏡花を回想した登張竹風の文を解説、㈧は麥人宛書簡の紹介、いずれも麥人架蔵書簡の翻字を含んで資料的価値が高い。万事に強記、手簡を大切に保管していた麥人ならではの手紙をめぐる「物語」である。

別稿にも記したが、「手紙もの語」については、吉田遼人氏からご教示を得た。その後の同氏の報告（第七十二回泉鏡花研究会発表資料「調査報告―『鏡花全集』未収の星野麥人宛書簡のことなど―」令和元年十二月七日、於昭和女子大学）では、鏡花の麥人宛書簡七通のうち、三通は岩波書店版『鏡花全集』に収録済み。二通は本項に記載したが、残り二通については、氏の報告が公表されるのを俟って追加することとしたい。

なお、麥人は後年の楠本憲吉との対談（「対談俳句史・第7回 揺籃期の人々」「俳句」九巻二号、昭和三十五年二月一日）の中で、「ある年の春の事」、俳句仲間の谷活東と二人で南榎町の鏡花自宅に立寄った際、たまたま来合せていた紅葉に引見、その場で鏡花の口添えがあって、活東ともども、かねてからの望みであった紅葉への入門を許された、と語っている。前後の文脈から推して、「ある年」は小石川大塚町から牛込南榎町へと移った翌年、明治三十三年「春」のこととしてよいと思うが、麥人活東の両人が鏡花の斡旋によって紅葉入門を果した事実は記録にあたいする。

明治三十六年（一九〇三）　癸卯　三十一歳

十一月　四日、故尾崎紅葉の初七日の逮夜を期として開かれた硯友社の相談会（於牛込吉熊）に出席した。

【典拠１】「よみうり抄」（「読売新聞」明治三十六年十一月五日付・一面）

◉硯友社　の諸氏ハ昨紅葉氏の逮夜を期とし牛込吉熊樓に会して社の将来について相談せしと

【典拠２】「紅葉山人追憶録　第七」（「新小説」八年十三巻、明治三十六年十二月一日）

○宙外君　それから食物などはどう云ふ物がお好きでした。

○るゐ子君　食物の方は随分むづかしいので、おれはモウ家に居る方が贅沢だ、人の家へ行けば贅沢を言ゃァしない。

○風葉君　料理屋ぢや中華が御贔負で、彼処の鶉の御椀に金ぷら（ママ）、甘鯛の照焼などが非常に御好きで……

○鏡花君　それから其の中華の向ふから茶飯を取寄せて御飯のあとが梅園の汁粉でした。

○風葉君　それに漬物の旨いのが非常にお好きでした。

○鏡花君　此の四日の吉熊の相談会の時なども、硯友社の人達は、石橋氏でも、岡田氏でも、口々に、「故人のいひぐさぢやないが香の物の旨いのを持つて来い」と。

【注記】

尾崎紅葉の初七日は十一月五日。その忌日前日の逮夜に硯友社の相談会が開かれたことは承知していたが、これに鏡花が出席していたのを見逭していたので、

新たに立項した。

当日は、夜の相談会に先立ち、尾崎家でも相談があったようで、江見水蔭『自己中心明治文壇史』（博文館、昭和二年十月二十八日）に、

十一月四日、尾崎家に行き、硯友社中、集まって、いろ〳〵協議をした中で、小波の案で、西洋風に故人の誕生日を記念すべく、十二月十六日に芝紅葉館で、紅葉祭を挙行する事を決議した。

（「一六　潮流変じて」の章）

とある。

諸書に、鏡花をはじめ紅葉の門弟を硯友社の者とする場合が多いが、彼らは紅葉らが興した硯友社の社員ではなく、紅葉門の藻社に連なる者である。歿後の博文館版『紅葉全集』の刊行の辞にも「曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、峻群英を養ふて藻社の名一生を壓す。」とあるごとく、硯友社の社員と藻社の社中とはそれぞれ集団を異にする。外から紅葉の弟子を硯友社の一員とみなすこともむろん多かったが、少なくとも紅葉の中では、厳然とした区別があった。

江見水蔭は前記『自己中心明治文壇史』で、明治三十三年ごろのこととして、

『時に硯友社の問題だが、今までの社中の他に、少し人を入れたらドンナものだらうか。』と切出した。

『人を入れる？誰を。』と紅葉は吃驚した様に云つた。

『イヤ、僕は二年弱東京を離れて、遠くから中央文壇を見てゐたのだが、地方に於ける君の門下の勢力といふものは非常だよ。殊に鏡花の如きに至っては、或は君以上に買冠ってゐる者も有るんだが……鏡花にしろ、風葉にしろ、春葉にしろ、もう何時までも子供ぢやァ無いんだからね。我々の後継者として最少し待遇を好くしやう（ママ）ではないか。』

自分の口から斯う云つたら、さぞ紅葉は喜ぶだらう位に思ってゐた、が、紅葉は少く考へてゐたが、

『硯友社は今までだけのもので、社中は社中だよ。彼達門弟を今更社に入れるといふ訳にも行くまいよ。玄関で諸君の下駄を揃へてゐた連中を、急に諸君と同等にはねえ……』と云つて斥けた。

（「一三　大洋に出て」の章）

と述べ、「義理堅い」とはいえ、紅葉の「偏狭な癖」ゆえの「時代遅れ」を感じたと記している。この紅葉の認識は三年後の逝去まで改められなかったことだろう。水蔭が進言したごとく、当時作家として文壇に活躍していたのは、かつての硯友社のメンバーであるよりもむしろ彼らの弟子たちが主であったから、今後のことを議する相談会に門生が加わったのは当然のなりゆきだった。

典拠2文中の「るゐ子君」は臨終まで付添っていた看護婦の竹島るゐ子。「中華」は日本橋伊勢町にあった割烹料理店「中華亭」のこと。この店の娘お福が紅葉文学の愛読者であった縁から贔屓とするようになり、死の間際まで病床に料理を取寄せた（昭和四年十一月三十日開催「紅葉山人二十七年忌記念講演」のうち市島春城「紅葉山人」に拠る。講演筆記を収める同会誌は刊行年月日記載なし）。「梅園」は浅草公園第七区馬道にあった汁粉屋（現在も営業）。

会場の吉熊は牛込区簞笥町三十五番地にあった料亭で、紅葉在世中は硯友社の新年宴会をここで催すのが恒例となっていた。

明治三十六年（一九〇三）　癸卯　三十一歳

十二月　二十日、さる十六日に逝去した落合直文（享年四十三）の葬儀（於青山墓地、午後一時駒込浅嘉町を出棺、三時すぎ着）に列席した。会葬者のうち、岡田朝太郎は親戚側、ほかに、森鷗外、井上哲次郎、井上通泰、国分高胤、大槻文彦、芳賀矢一、関根正直、三上参次、荻野由之、武内桂舟、巖谷小波、幸田露伴、小栗風葉、千家尊福、尾崎行雄をはじめ、友人（総代上田万年）、門生（同与謝野鉄幹）等、一千余名に

及んだという。高村光太郎は新詩社を代表して会葬した。

【典拠1】「落合直文氏逝く」（「東京日日新聞」明治三十六年十二月十八日付・四面）

国文界の名家落合直文氏は昨年来健康を害ひ先月末より病勢頓に進みて遂に去る十六日を以て逝去せり享年四十三氏は仙台藩主伊達家の一門鮎貝盛房氏の二男にして国学者落合直亮翁に養はる神宮本教館東京大学古典科に学びて夙に秀才の誉あり学成りて後皇典講究所国学院第一高等学校国学伝習所、帝国教育会、教員養成所、外国語学校の教師に聘せられ良教師の名到る処に嘖々たりと惜むべし

【典拠2】「故落合直文の葬儀」（「二六新報」明治三十六年十二月二十一日付・三面）

予記の如く昨日午後一時駒込浅嘉町なる萩廼家を出棺せしが質素なる裡に荘厳なる行列にて棺側には門下生塩井雨江、大町桂月、服部躬治、毛呂清春、内海月杖、与謝野鉄幹の六名烏帽子直垂を着け素足にて悄然として従ひしは先づ衆目を惹きて憐れなりき青山墓地にては神宮奉斎会礼典部長村田清昌祭主となりて叮重なる儀式あり次に友人総代上田万年の弔詞、国学院々長佐々木伯其他諸団体の弔詞、門生総代与謝野鉄幹、浅香社総代国分操祭文を朗読し終つて一同玉串を捧げその式を終れり当日の重なる会葬者は森林太郎、井上哲次郎、井上通泰、国分高胤、大槻文彦、上田万年、芳賀矢一、関根正直、三上参次［、］荻野由之、武内桂舟、巌谷小波、幸田露伴［、］小栗風葉、泉鏡花、千家尊福、尾崎行雄等を始めとし友人門生等無慮一千余名に上り故人が文界に重きをなせると後進を誘掖せる区域の広かりしとを想はしめたり

【典拠3】「社告」（「明星」辰歳一号、明治三十七年一月一日）

◉旧臘二十日故落合直文先生の葬儀には、高村砕雨、川上桜翠の二氏本社を代表して会葬せり。（与謝野生）

【典拠4】「嗚呼故落合直文君　岡田朝太郎氏」（「国文学」六十二号〈萩の家主人追悼録〉明治三十七年二月二十五日）

いよいよ病勢が重つてからも、余り医師の選択などに重きを置かず、投薬は医者の任務だが、命数は天にあると口癖にいつて居られて、家族や門生や、其他の知人も、これにはちと閉口して居つたのでありますが、未亡人と荊妻とは、いとこ同士の事でありますから、一日荊妻が、未亡人と共に枕辺に在つて、「貴方は天命をあきらめるだけの識見を持つて安心してお［い］でゞあらうが、家族や親族はそんな強い者ばかりはありません。人に安心させる為に、なほ多くの医師を迎へていたゞきたい」と勧めまして、それから入澤博士にも来診を受けたのであります。――十二月の十六日は、恰も親友紅葉山人の記念日で、荊妻と共に紅葉館に参つて居りましたれば、主人の訃に接しまして、自分は手が引けませんから、妻だけはすぐ先へ帰してしまひましまが（ママ）、恰度紅葉祭に於て、私が紅葉の師弟の間柄の、現時他に多く例のない事を述べました、其辞は、同じく萩の家門下にも全く適当するのでありまして、思へば去年は、私の極めて不幸な年でありました。

【典拠5】「彙報」（同右）

●葬葬。（…）喪主落合直幸氏の、濃き鈍色の喪服に藁履を穿ち竹杖を携へて、歩にも堪へざるが如くなりしは、殊に人々の袂をしぼらしめぬ。尾上柴舟、伊藤正弘の二氏は、喪主の君の介添として従へり。次には、令息直道氏、令弟壱岐寅之進氏は徒歩にて、夫人操子氏、令嬢澄子氏、令息直児氏、直美氏、壱岐夫人艶子氏、令兄鮎貝盛徳氏は車にて、菊川流雪氏、鮎貝新次郎氏、藤本峯太郎氏、富田道生氏、下郡山誠一氏、岡田朝太郎氏等は、親戚として徒歩にて従はれたり。

【注記】

『近代文学研究叢書』第七巻（昭和三十二年十二月十日）落合直文の「資料年表」

には、「東京日日新聞」の訃報（典拠1）は載っているが、葬儀に関する他の新聞報は採られていない。「二六新報」は葬儀の報（典拠2）のほか、「画報（一四一四）故落合直文氏」（十二月十八日付・一面）に長原止水の肖像画入りで訃を伝え、「上田博士の弔詞」（十二月二十二日付・三面）で友人総代上田萬年の弔詞を載せている。他紙では、「読売新聞」（十二月十八日付・一面）が「よみうり抄」で訃報を、「東京朝日新聞」が訃報（同・二面）と葬儀（十二月二十一日付・一面）をそれぞれ伝えているが、鏡花の参列は記されておらず、「報知新聞」の「故落合直文氏の葬儀」（十二月二十一日付・三面）は「二六新報」（典拠2）とほぼ同文であり、取材源を同じくするものと思われる。

「二六新報」（典拠2）には、最後に門生総代与謝野寛の長文の弔詞が載っているが、引用を省いた。その鉄幹主宰の「明星」では、一月号（典拠3）巻末「木枯のあと（故落合直文氏追悼録）」で右弔詞を、二月号に一月十日の「故萩之家先生追悼会」（於上野花月亭）における森鷗外、市村瓚次郎、井上通泰、関根正直の談話、大町桂月、鉄幹の演説を載せるほか、「故落合直文氏の霊柩」「故落合直文氏」「落合氏青山墓地」「墓前に於ける落合夫人と門生」「故落合直文氏と夫人令息門生および萩の家」（門生は鉄幹）の五葉の写真を収録している。

「国文学」の「萩の家主人追悼録」（典拠4）は、「嗚呼落合直文君」として先の「明星」掲載の追悼会における談話を含み、全十五氏のもののほか、二十四氏の詩文、「嗚呼萩の家先生」として門生十二氏の談話、同じく四十七氏の詩文、「終焉の記」「通夜の記」「うつし闇」の諸文を収める。

高村光太郎は当年二十一歳、三十三年鉄幹の歌に心動かされて新詩社へ入り、「砕雨」の号で短歌を投じ、前年の三十五年に東京美術学校彫刻科を卒えて、その研究科に身を置いていた。

鏡花周辺の人物では、久保より江が直文門下として参じ、この年五月に結婚した夫猪之吉は当時留学中の独逸で訃を知った。国学院で直文の教えを受けた谷活東は、同誌第七十号の「萩の家先生追悼記念号」（明治三十七年十二月十日）に「梅鉢の御紋」を寄せて恩師を偲んでいる。

直文の逝去した十二月十六日は、典拠4の岡田朝太郎の談話にもあるごとく、師尾崎紅葉の誕辰日に当り、前々月三十日に歿した紅葉の追悼会（於紅葉館。ノチ紅葉祭）が開かれており、岡田とともに鏡花もこれに出席していた日であった。

明治三十六年（一九〇三）　癸卯　三十一歳

十二月　二十九日付「二六新報」（第二面）の社告「編輯局面の大発展」の末尾「社友として既に執筆を承諾せられたる文士」十二名のうちに名を列ねた。

＊活字の大きさは均等とした。

【典拠】「社告　編輯局面の大発展」（「二六新報」明治三十六年十二月二十九日付・二面）

評論壇上の新光彩　三面記事の好模範

二六新報が新聞紙としての機関は日に益々完備して、今や亜細亜洲中第一の紙数を発行するに至れり、然れども吾社はこの小成に安んぜず奮つて益〻天職を尽すべく編輯販売の法を講ずるに於て遺憾なからんを期す、（…）

第一面に於て別に社会的評論欄を設け天下知名の論客文士（追て発表）に托して社会文学各方面の評論を請ひ、同時に

第三面社会的記事に於て一頭地を抽かんが為め、従来の記者の外更に川上眉山、江見水蔭其他数名を増聘し、且つ当代の文豪に嘱して社友と為し、普通の小説美文以外、叙事的紀実――三面美文に執筆を煩はし、毎日の紙上に必ず之を掲載せんとす是れ我国新聞雑誌ありてより以来の一大異彩にして実に吾社の特色たるなり、（…）而して社友として既に執筆を承諾せられたる文士

は左の如し

（イロハ順）

巖谷小波　石橋思案
泉　鏡花　生田葵山
徳田秋聲　小栗風葉
内田魯庵　野口寧斎
柳川春葉　斎藤緑雨
後藤宙外　広津柳浪

此の如くにして二六新報は社内社外相応じて交る〴〵毎日の紙上に金玉の文字を掲載し、尚零細の出来事を記すにも一字一行充分に注意して粗漏なきを期するが故に、材料文章両ながら相待て今後の紙上大に見るべきものあらん

【注記】

右の「社告」は、以後翌年一月九日まで連日紙上に掲げられた。

この件に関し、江見水蔭は『自己中心明治文壇史』（博文館、昭和二年十月二十八日）の「一七 狂瀾の如く」の章で、三十六年歳末に堀紫山が来訪し、川上眉山とともに「二六」入社を慫慂された際、条件として、月俸は眉山よりも上であること、新聞社の岡鬼太郎を中心とする川上音二郎攻撃の場合には自分の了解を得た上ですること、の二点を要望して容認され、「月俸は百円、他に十円の手宛を附けるといふ事で、早速入社之辞を送る事に成つた」（圏点は原文）、と述べている。

「入社之辞」は眉山のものが十二月二十七日付（三面）、水蔭のものは同二十九日付（三面）に掲げられた。さらに同書では、当時の「二六新報」社長秋山定輔以下の社員、記者の名を列記したのち、この社告の内容に触れ、「これが新聞雑報の革新を計る陣立で有つたが、社告だけで実行を見なかつた。」と述べているが、水蔭作「荒鷲の爪痕」（明治三十七年二月三日—三月十二日。署名は「角燈子」）以下の数多の軍事小説（短篇読切）が日露戦時の紙面に掲げられたのみで、他の「社友」の作品が掲載されることはなかった。

三十五年十月に病骨の紅葉を社員として迎え、一年後の十月三十日に彼を喪った「二六新報」は、硯友社の同明眉山と水蔭を入社させたのみならず、小波、試案、柳浪らと、門生の四天王鏡花、風葉、春葉、秋聲を社友に加えて「局面の大発展」を図ったのだったが、水蔭を除いて捗々しい作品を得ることは叶わなかったのである。

明治三十七年（一九〇四）甲辰　三十二歳

一月　一日付「電報新聞」（第八面）に載った牛込神楽坂三業の新年挨拶の蔦永楽抱え七名のうちに桃太郎の名があった。

【典拠】広告「新玉の御寿芽出度申納め候」（「電報新聞」明治三十七年一月一日付・八面）＊活字の大きさは均等とした。

神楽坂の部

神楽町三丁目 本 むさし	又平
若治	桃太郎
萬歳	小直
小竹	半いろ
半 才蔵	五郎
豆子	うた
おべん	（…）
神楽町三の二 蔦 永楽 電話番町四六七番	神楽町三の八 相撲屋
おかめ	一二三
	小ゑん

【注記】

典拠の「電報新聞」は、前年三十六年十一月二十四日の創刊で、この新年一日付は第四十号にあたる。

牛込地区のまとまった広告は比較的珍しいが、翌三十八年、翌々三十九年の新年号には広告が無い。引用を省いたが、芸妓家のあとには、料理屋（歌月、鳳楽園、都樓、田毎）、待合（稲本、瓢家、楓月、中村家）の名が並んでおり、当時の牛込三業の一端を窺いうる。

この二年後の読売新聞社版『東京案内』（明治三十九年五月二十八日）の「芸妓屋名」（三十八年十一月調）には、萬むさし、永楽家、小松葉、松葉家の名が載せられているが、三十七年当時、芸妓の数「百二十三人」（「吉原其他各所の三ヶ日」「都新聞」明治三十七年一月五日付・一面）とされた神楽坂の芸妓家は、もとより典拠の広告に盡きるわけではない。八年後の明治四十五年「都新聞」（一月一日付・七面）の「牛込神楽町芸妓家」の広告には、都合四十軒が名を連ねており、同じく待合は三十三軒である。

典拠の三十七年当時の蔦永楽の抱えは、半玉も含めて七名、神楽坂では新松葉の八名に次ぐ人数である。相模家の小ゑん（本名村上まち。当年二十五歳）は尾崎紅葉馴染の芸妓として知られる。六年後の明治四十三年一月一日付「都新聞」の新年挨拶では、蔦永楽の抱えが、いろ、桃太郎、ひで、蔦次、とんこ、しゅん、三助、小つや、歌、の九名に増えている。

鏡花夫人伊藤すずの桃太郎時代については、村松定孝「「婦系図」の虚構の意味―畑井つる女聞書に基づく事実の解明―」（『泉鏡花』寧楽書房、昭和四十一年四月二十日）に詳しいが、文中に「相模屋の女主人ひふみは、端唄俗曲の師匠を兼ねており、なかなかの芸達者であったから、小ゑんも亦芸は怠らぬほうであった。また前述の蔦栄楽（ママ）には又平という音締めの冴えた芸者もいた」（傍点原文）とあるのと典拠の広告とは一致している。

ただし、「桃太郎は清元と花柳流の踊を得意としたが、名取では無く、品は悪くはなかったが、どちかたといえば、むっつり型で、お座敷は冴えなかったという。」（同前）としている点については、本「補訂（十六）」で、三十五年十月七日付、三十六年二月八日付、三十七年一月五日付、同三月十三日付の「都新聞」（各三面）に桃太郎の近状や風聞が報じられているのに基づき、従来伝えられてきた「お座敷は冴えなかった」という彼女の印象に修正の要のあることを述べ、また三十九年三月の時点で、桃太郎の妓名は、伊藤すず（当時二十六歳）から、中村きさ（明治二十一年五月生、当時十九歳）へと引継がれていることも指摘した。

その後、『東京明覧』（集英堂、明治三十七年三月三十一日）を検めたところ、第二十二章の「芸妓」の項に「牛込芸妓」八十七名のうち「蔦永楽」の抱え七名の最後に載る「桃太郎」は、明治「二十一年五月」生れの「中村まさ」となっている。前記「きさ」とこの「まさ」は生年月が一致するので同一人物と思われるが、もって伊藤すずからの妓名の引継ぎは、本書刊行の三十七年三月の時点まで遡りうることになり、先の「都新聞」の風聞は、桃太郎の名を譲る直前の報となる。とすると前記「「婦系図」の虚構の意味」の畑井つる女が芸者に出た三十六年以降、すずが「蔦栄楽（ママ）の桃太郎としてお座敷を勤め」、「三十九年（正しくは三十八年）の七月に鏡花が一家を挙げて逗子田越に引越し、三年間を同地で過すことになったとき、正式に素人になったことになる。」という記述に検討の余地が生じる。少なくとも三十七年三月末の時点で、伊藤すずは蔦永楽の桃太郎ではなくなっていたからである。

また、村松氏の別の著『あぢさゐ供養頌』（新潮社、昭和六十三年六月五日）に、前記畑井つる女からの聞書を再説し、桃太郎が座敷に出ていたのは「たしか日露戦争が終わった年」すなわち明治三十八年まで、としている点も同様に検証が求

められる。

なお、両書に、畑井つる女は明治二十三年生れ、三十六年に「わけ松葉」という芸者屋の看板を買い、「畑松葉」の屋号を名乗って自前で立った、というが、それから九年後の、前述「都新聞」明治四十五年一月一日付（七面）の広告に「畑松葉」の名は見えない。

聞書はたしかに貴重な証言であるが、これを裏付ける傍証を得てはじめて有効になりうるものと思う。その信憑性について慎重な検討を要するゆえんである。

［付記］

現在、別稿「尾崎紅葉の死―その前後―」を執筆している関係上、今回は明治三十六年前後の項目が多数を占めるに至った。同じような密度で調査を進めればより補訂が進むはずであるが、いまはそのゆとりがなく、「尾崎紅葉の死」と併行してゆくしかない。

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、青山学院大学図書館、本学図書館とりわけ近代文庫のお世話になった。併せて深謝申し上げる。

（よしだ　まさし　日本語日本文学科）